

令和6年度 奈良市立佐保幼稚園 研究実践概要

園長名 坂上 紀子

全園児数 22名

1. 研究主題

豊かな体験活動を通して、幼児の主体性を育てる
ー身近な自然環境と関わる中でー

2. 研究年度

2年度

3. 研究主題設定理由

核家族化や地域のつながりの減少から幼児の人や環境に関わる力が弱くなっている現状を受け、今年度も「幼児の主体性を育てるための豊かな体験活動とはなにか」について職員間で検討を重ねた。そこで、本園の豊かな自然環境に着目し、幼児が信頼できる保育者と関わり、安心して園生活を過ごす中で、身近な自然物を実際に見たり触れたりし、自ら感じ考えながら遊ぶ経験が大切なのではないかと考え、この主題を設定した。

4. 具体的な研究内容

①研究のねらい

- ・身近な自然環境に興味・関心をもって関わる中で、心を動かす体験や夢中になって遊ぶ経験を重ね、意欲的・主体的に活動する幼児を育てる。
- ・職員間で日々の保育の反省、情報交換や園内研修を通じて、各年齢の発達に応じた環境構成、援助の在り方を探る。

②研究の重点

- ・幼児が身近な自然環境との関わりの中で夢中になって遊ぶ姿を捉え、その要因となった援助や環境構成を検討する。
- ・「奈良市こども園カリキュラム」を活用し、幼児の発達に沿った主体性につながる姿を捉え、援助や環境構成の工夫を実践・分析する。

③活動の方法

事例1 【4歳児】 6月 『いちご組レストラン ～こんなすごい色になった!～』

エピソード	身近な自然環境と関わるための要因
<p>・自分で使いたい用具（すり鉢、おろし器、ボウルなど）や草花や梅、ヤマモモの実などの自然物を選び、ごちそうづくりをすることを『いちご組レストラン』と呼び、遊んでいた。</p> <p>・石鹸と水、マリーゴールドを一緒混ぜると、「クリームが黄色になった!」と泡の色が変化することに気付いた。このことがきっかけとなり、泡に</p>	<p>・様々な自然物と関わって遊ぶことができるように草花や実を遊びの場に用意したり、遊びに活用することを見通し、色が豊富なパンジーやビオラを栽培するなどし、園内で子どもと一緒に集めたりできるようにする。</p>

<p>草花を混ぜる子が増え「先生！見てみて！こんなすごい色になった」と黄色の花を混ぜて、濃いオレンジ色のクリームや、赤い花と実では「なんか水色みたいになった」と予想と違う変化に笑顔になる。</p> <p>・保育者や友達と、できた泡を見せ合うと「色が違うね」「下から見たら色がめっちゃ見えるよ」と、ボウルの底から見たり「何混ぜたの？」と尋ね合ったりし、自然物、石鹸、水の組み合わせならではの不思議や面白さを感じて繰り返し遊んだ。</p>	<p>・保育者が側で気付きに共感しながら、遊びの一員となって一緒に遊ぶことで、「もっとしたい」と思えるようにする。</p>
	
<p>(反省・評価)</p> <p>豊富な自然素材に触れて遊べる環境があったことで、興味を持って関わり、自然物ならではの面白さや不思議に出会い、「もっとやりたい」と繰り返し遊ぶ姿に繋がっていった。</p>	

事例2 【4歳児】 11月 『いちご組レストラン ～佐保牧場のおいしい牛乳～』

エピソード	身近な自然環境と関わるための要因
<p>・紫色の花でつくったピンクの色水に、削った石鹸を入れると青色に変化した。そこに“すだち”の果汁を絞って入れてかき混ぜると、泡が消えてなくなり、石鹸が溶けて白い水ができる不思議な発見をした。先日、植村牧場に行った経験から「牛乳ができた！」「搾りたてのおいしい牛乳をメニューに入れよう」「牛乳パックに入りたい」と話す。</p> <p>・「どうやってつくるの？」「最初は、お花をね…」と、側で遊んでいた子に方法を知らせたり、つくってみたりした。「私のいちご牛乳になった」「牛乳シチューつくるわ」「ドングリを入れたら、ミルクティーになった」と、混ぜるものによっての色の違いを楽しんだり、牛乳を使ったメニューを考えたりすることを楽しんだ。</p>	<p>・園内で子どもと一緒に集めたものに加えて、季節の自然物に関わることができるように野菜や果物の皮なども遊びの場に用意しておく。</p> <p>・友達と考えを伝え合えるように仲立ちをしたり様子を知らせたりし、興味を広げられるようにする。</p>
	
<p>(反省・評価)</p> <p>自然物の組み合わせによって起こる反応と偶然出会ったことをきっかけに、試したり、方法を友達に知らせたりして遊んだ。『いちご組レストラン』の遊びを通して、四季折々の自然物と出会い、関わって遊んできた経験があったことで、どんどん試して遊ぶ姿に繋がっていった。遊ぶ中で自然物の色や匂い、感触に気付いたり、木の実を集めたり、葉が紅葉していく様子に心を動かすなど、身近な自然環境への興味や関心が高まり、気持ちを持続させて遊んだり、遊びに使う自然物を子ども自ら集める姿も見られるようになった。</p>	

事例3 【5歳児】 6月 『ウォータースライダー』

エピソード	身近な自然環境と関わるための要因
<p>・築山から水を流して遊んでいた子ども達。土が削れてできた細い溝に落ち葉などを流したりスコップを持ってきて溝を広げたりすることを楽しんでたが「もっと大きくしたら滑れそうやな」「ウォータースライダーみたいにしたい」という思いが生まれ、タライに水を溜めて滑ることを試してみるが全然滑らない。</p> <p>・「どうしてだろう」と考えていると、一人の子が「もっと山を高くしたらいいんじゃない」と話す。そこで周りの土を集め盛り土をしていると、様子を見ていた周りの友達も集まってきて一緒に参加する。高くなった山でもう一度挑戦すると、今度は少しだけ滑ることができた。「動いた!」と喜ぶ子や「もっと滑るようにしたい」とマットを敷いて一緒に滑ることを試す子など、いろいろな姿が見られた。</p> <p>・翌日も、何度も繰り返し水を流して滑りながら「ここに座ると一番よく滑るよ」「水をジャーって(勢いよく)流すといけるよ」と上手く滑る方法を伝えあう姿が見られた。</p>	<p>・子どもの思いを受け止め、ブルーシートを用意するなどすぐに試せるようにする。</p> <p>・子ども達の話し合う様子を見守り、思いが伝わるように言葉を補完したり質問して思いを引き出したりする。</p> <p>・ウレタンマット、タライ、などを用意しておき、滑る方法をいろいろと試せるようにしておく。</p> 
<p>(反省・評価)</p> <p>「ウォータースライダーみたいに水を流して滑ってみたい」という思いをもって試したことが上手くいかなかった時「どうしたら上手くいくだろう」と考える姿があり、友達同士で話し合っていた。保育者はその様子を見守り「山を高くするとどうなると思う？」など子どもが伝えたいことを言葉にできるように質問するなどして思いが伝わるようにした。そのことが「たくさん滑るようにしたい」という思いを友達と共有して遊ぶ姿につながったと思われる。</p>	

事例4 【5歳児】 10月 『クリアしたらドングリあげることにしよう』

エピソード	身近な自然環境と関わるための要因
<p>・木の板や巧技台などを並べて、アスレチックコースをつくる遊びが続いている。その近くでブリキのバケツにドングリを入れて遊んでいた子ども達が「玉入れみたいにしたい」と話したことから、木に吊したバケツに玉入れの要領でドングリを投げ入れる遊びがはじまった。ドングリがバケツにあたる音やたくさん入るとバケツが下りてくるのが楽しくて繰り返し遊ぶ子や、重りとしてつけてい</p>	<p>・必要なものを遊びの場の近くに片づけるようにし、自分達で準備ができるようにしておく。</p> <p>・ドングリを集めるために使っていたバケツにロープを結び、逆側に水の入ったペットボトルを重りにつけて木に吊るす。</p> <p>・遊びの振り返りの機会を設け、気づいたことや困ったことなどを友達</p>

<p>るペットボトルの水の量を変えてどうなるのか試している子もいる。一方で、ドングリ玉入れに人が集まると、自分の投げやすい場所を巡って困り事が見られるようになった。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・その日の振り返りの中でこのことが話題になると「コースをクリアしたらドングリをもらえることにしたらいい」と話す子がいて、周りの友達も賛成し「じゃあ、ドングリをあげる係がいるね」「私やりたい」「一緒にやろう」と盛り上がる。 ・次の日には、自分たちでお椀やドングリを用意したり「全部クリアしたらここに来てくださーい」と友達に呼びかけたりしながらコース遊びをする姿が見られた。 	<p>に伝えられるようにするとともに、気づきや明日したいことをみんなで考え、共有できるようにする。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・話し合ったことを思い出しやすいように、保育室の見やすい場所にドキュメントを掲示しておく。 
<p>(反省・評価)</p> <p>園庭にたくさん落ちていたドングリを遊びに使えるようにと意図してバケツを吊りしたことから、玉入れのような遊びの中で音や動きを楽しむ姿や重さのつり合いに気づき、試そうとしている姿が見られた。また、振り返りで話し合う中で、近くでしていたアスレチック遊びの中に取り入れるアイデアが生まれ、役割などを考えて行動することにつながった。</p>	

5. 研究の成果

季節や子ども達の遊びの姿に合わせて環境を見直し、子ども達が身の回りにあるものを自由に使って遊ぶように用意したことや、花壇の世話や畑の土づくりなど園全体の環境も保育者と一緒にやってきたことで、身近な環境との結びつきを感じながら関心を深め、自然物の特性に気付く姿や試行錯誤する姿に繋がっていったと考える。自然物がある場所や雰囲気なども子どもにとって身近な自然環境であり、様々な要因が影響し合って形成されていることにも改めて気付くことができた。

子どもが主体的に遊ぶために保育者は発達段階をとらえ、子どもの姿から興味や関心はどこに向いているのか、何を楽しんだり、面白いと感じたりしているのかを見取り、思いに寄り添いながら必要に応じてヒントや認める声かけ、見守りなどその年齢や場面、ねらいにそった援助が必要であると感じた。

6. 今後の課題

本園の自然環境を把握し、子ども達が季節の自然に触れながらその特徴や変化の様子に気づき、興味をもって更に「こうしたい」「こうなるかも」という思いに向かって友達と試行錯誤出来る姿に繋がるような環境を計画し、引き継いでいけるようにすることが必要である。

幼児の自然環境に関わる姿を、「奈良市こども園カリキュラム」や「幼児期の終わりまでに育って欲しい10の姿」などの視点から読み解き、幼児理解を深め一人一人の興味関心を把握しながら、子どもの心を動かし「もっとやってみたい」と幼児が能動的に身近な自然に関わり、豊かな体験活動につながるような保育内容の創造に努めていく。